

主要登場人物

ラインハルト・フォン・ローエングラム

(Reinhard Herzog von Rohengram)

金髪と蒼氷色アイスブルーの瞳を持つ貴公子。戦争の天才。銀河英雄伝説の主人公の一人。元帥。ローエングラム公爵。

ジークフリート・キルヒアイス

(Siegfried Kirchais)

ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感じの良い青い目の長身の若者。上級大将。ガイエスブルグでアンスバッハによるラインハルト暗殺を阻止した際に重傷を負うが、その後回復し、ラインハルトの麾下に戻る。

アンネローゼ・フォン・グリュネンワルト

(Annerose Graf in von Grunewald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリュネンワルト伯爵夫人となる。そのフリードリヒ四世の死後、ラインハルトたちの許へ戻るが、その後、フロイデンへと隠棲する。

ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ

(Hildegard von Mariendorf/Frau ein Mariendorf)

マリンドルフ伯爵家の一人娘。伯爵令嬢マリンドルフ。通称ヒルダ。短くした、くすんだ金色の髪とブルー・グリーンの生き生きした瞳の、美貌の少年を思わせる女性。リップシュタット戦役に先立ってラインハルト陣営への協力を申し入れ、ラインハルトの知遇を得る。帝国宰相首席秘書官として、ラ

インハルトを補佐するとともに、ラインハルトのよき相談相手となる。本編から帝国軍幕僚総監代理に任じられた。

ヤン・ウエンリー

(Yang Wen-ri)

同盟軍大将。イゼルローン要塞司令官・兼・駐留艦隊司令官。歴史を学ぶ目的で同盟軍士官学校に入り、そのまま意に反する形で軍人となる。「エル・ファシル」で多くの民間人を救い、若き英雄となる。銀河英雄伝説の主人公の一人。

フレデリカ・グリーンヒル

(Frederica Greenhill)

同盟軍大尉。知性と美貌を兼ね備えた、ヤンの副官。

ウランフ

(Uranf)

同盟軍中将。第一〇艦隊司令官。アムリッツアに先立つ、惑星リユージェンでの戦いでビットェンフェルトと戦い、敗れる。原作ではそこで戦死しているが、本編では生き残り、第一四、第一五艦隊の編成と訓練に当たると共に、ビュコックやヤンのよき相談相手になっている。

アレクサンドル・ビュコック

(Alexander Bukock)

アムリッツア後、大将となり、同盟軍艦隊司令長官となる。同盟軍の宿将。原作黎明編ではもっと怖いオッサンかと思っていたが、その後、案外に話の分かる老師という感じの人であることが分かった。

ジョブ・トリューニクト

(Job Trunicht)

同盟最凶の政治家。現時点ではそれ以上のコメント

なし。

ネグロボンティ

(Negobonti)

原作では、この時期になるとW・アイランズ氏が国防委員長になってはいるはずだが、例の査問会を省いたので、まだこの方が国防委員長のまま。書いている内に、非常に鬱陶しい人柄であることが分かったし、アイランズ氏を国防委員長に据えないと拙いのだが、まだ本編では交替に至っていない。

ドーン

(Dawn)

同盟軍統帥本部長。大将。ジャガイモ野郎。

アドリアン・ルピンスキー

(Adrian Rupinsky)

フェザーン自治領主。

ルバート・ケッセルリンク

(Rupert Kesselring)

フェザーン自治領主補佐官。原作では辛辣なやり手でありながら、最後はルピンスキーに出し抜かれた気の毒な人物。本編に先立つ、『木漏れ日と遠き日』ではコルネリア・ゲルトルーデにかなり酷い目に遭わされて、やっぱり気の毒な役回りをしている。

クリストフ・ディッケル

(Christof Dickel)

同盟軍士官学校に首席合格し、その後首席で卒業していった、亡命者の少年。トリューニクトから青少年栄誉賞を授与された。

本編オリジナルキャラクター紹介

マルガレータ・テレゼ・フォン・ヘルクスハイマー

(Margareta Theresen von Herxheim)



OVA『奪還者』に登場した、ヘルクスハイマー伯爵の娘。

亡命後、グレーチェン(グレートヒエン)・テレサ・ヘルクスハイム(Gretchen Theresa Herxheim)を名乗るようになる(ここにした)。紫水晶のアメシット

瞳と淡い金髪の所有者。本編では、同盟軍士官学校在籍中。戦略研究科生徒で、ブランドンと首席を争う優等生。本編終了時で公式年齢は一八歳(一歳詐称しているので実際は一七歳)。

ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング

(Wenzel Heinrich von Bendring)



同じくOVA『奪還者』で、最後にマルガレータを同盟へ亡命させる上での後見人として、彼女に同行した、伯爵家の三男坊。本編では、同盟軍統帥作戦本部情報部の少佐として、帝国軍の再建状況に関する諜報

活動に携わっている。

『奪還者』をつぶさに見ていくと、ベンドリングは実は Wenzel、ヘルクスハイマーは Margareta と字幕表示されていた。今更修正も馬鹿馬鹿しいし、Wenzel ならベンドリングではなくて、ヴェンドリングという表記にすべきでしょう。まあ、余り気にしないことにします。

活動に携わっている。

ティフリー・ブランドン

(Tiffany Brandon)

同盟軍士官学校でのグレーチェンの同期生。クルーカットの髪型、頑丈な体つきを生真面目な少年。士官学校では、グレーチェンと首席を争う。モデルとしては、その昔、米国幼年学校での悲劇を描いた映画(TAPS)の登場人物たちがそれに当たる。グレイチェンとも浅からぬ縁を持つことになるが……

シャルロッタ・ゼーダーシュトレーム

(Charlotte Seestrom)

同盟軍士官学校でのグレーチェンの同期生。通称ロッティ・セーデル(Lotti Seel). 黒髪・黒瞳の、グレーチェンよりも実年齢二歳年上、テルヌーゼン出身の女子生徒。旧式の丸いフレームの眼鏡がトレードマークだが、実際には視力矯正手術を受けていて眼鏡のレンズには度が入っていない。航法科の優等生であり、グレイチェンの親友となる。

フランツペーター・ヨハネス・パウアーシュミット

(Franz Peter Johannes Bauer Schmitt)

帝国宰相府付き宿直医で、国立オーティン文理科大学医学部準教授。膠原病の専門研究者としての実績もあり、同時に臨床医としても優秀な経歴

を持った若い医師。苗字がこともあろうにパウアーシュミットであるのは、筆者の趣味に属する。

コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットパウアー

(Cornelia Gertrude Vizegräfin von Schmittpauer)

シュミットパウアー子爵家当主。シュミットパウアー子爵夫人。通称ゲルタ。皇帝エルウィン・ヨゼフ二世を誘拐し、二週間あまりも帝国軍の追求をかいくぐってのけた。ラインハルトが皇帝に対する処遇を改める旨を公表したことから、皇帝と共に戦没者記念墓地に現れ、夫と兄の墓所の前で事切れる。始祖がルドルフ一世から与えられた、『帝室のために身を挺せよ』の言葉を最後まで実践した、シュミットパウアー一族の最後の一人。ヒルダの友人でもあった。白兵の名手でもあり、キルヒアイスとは二度、ラインハルト自身とも一度、直接に白兵戦を戦っている。

元々、『余りに弱すぎる門閥貴族軍』に、一家からい、ラインハルトに一矢を報いる貴族がいても良いだろうと言ったことで登場した。兄ヨハン・クレメンツはラインハルトの暗殺を、夫ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールはリップシュタット戦役での大逆転劇をそれぞれ狙ったが、いずれも目的を達し得ずに斃れている。言ってみれば、悲劇の一族の末裔。